

ねじれたパリ

松田恵美子

サクレクール寺院からはパリを一望することができる。しかし二月の厚い雲のせいで、遠くの方はぼやけたような静かな景色が広がっていた。美加は買い物袋を地面へ置いて柵のところ立つと、冷たい風で頬を赤く染めながら、しばらくの間昔を思い出していた。

「風邪引くよ、パリの冬は冷えるから」

そう言うと、頭の中に現れたルイが自分のマフラーを外して美加の首に巻いた。

「日本とは違う寒さ、なんでマフラー忘れてきたんだろ」

美加よりも頭二つ分ほど背の高いルイが後ろから腕を回した。抱きしめながらルイは今すぐにオニオンスープが食べたいと言い、美加はすぐにホットココアが飲みたい、それなら同じ店で休憩できないねなどと言いつつ合点した。思い出すのはそんな何気ない会話だ。耳元で声を出されると美加は顔がくすぐったくて体をよじった。

南仏のリヨンから出てきてパリでカフェを持っていたルイは、パティシエを目指していた美加の修業先だった。旅先で何気なく立ち寄ったタルトの味が忘れられず、気がついたら十八の夏にフランスの真ん中に住まいを決めていた。当時、今の美加より少し上の三十八歳だったルイは、そんな美加の願いを聞き入れ、弟子にしてくれた恩人だ。今もそうだがあの頃から口を開けば食に関する話ばかり。ルイは、今では美加の夫で、仕事のパートナーでもある。

四時を告げる寺院の鐘が鳴り、美加が我に返る頃にはフラットシューズから顔をのぞかせた足の甲がすっかり冷えきっていた。

首に手を当てると本当にマフラーを忘れてきていた。ハイネックを着ていてもコートの際の間から冷たい風が入り込んできて寒い。美加は先ほどカルフルで購入した買い物袋を二つ片手に持つと、反対側の手でコートの襟を手繰り寄せて足早に歩き始めた。階段をくだらうか、それともフニクレールに乗らう

か悩み、寒さを我慢できず切符を買った。

ゆつくりとフニクレールで下降すると、アラブの物産や絵葉書など観光客用に土産を売る店がひしめき合っている通りになる。美加はシューズを石畳に響かせ早足でアベス通りまで戻ると、今度はお目当のパン屋の玄関をくぐった。店内に入ると暖房の暖かい熱気が肌全体に広がり、一気に体温が戻ってくるのを感じる。

「ボンジュール、ムシユー。寄り道して遅くなってごめんなさい。予約していたパンを取りに来たの」

美加は店長を見つけると手を挙げた。

「待ってたよ、今日もまた寺院へ？」

飛び出したお腹を抱えた店長が、美加を見つけると奥からバケットを取り出してきて手際よく紙で巻いた。

「よかったら試食してく？ 女房の自信作なんだ」

そう言って店長がかごに入れたパンを差し出した。

「ありがとう、少しだけ頂くわ。すぐに夕飯だから」

「じゃあおまけにつけとくよ」

店長が新作を袋に入れると美加へ手渡した。

「すごくいい香り、何の材料を使ったの？」

「秘密だ、でも美加なら簡単にわかると思うよ」

袋の中へ顔を突っ込み匂いを嗅ぐ美加に向かって店長が答えた。

「何かしら」

二人で食材についての議論を交わしていると、扉が開いて次のお客がやってきた。店長が接待を始めたので美加は「ありがとう」とだけ言う通りに出た。

小さな教会、町のメリーゴーラウンド、夏には活気を帯びるアベス通りも冬の午後は冬眠しているように息を潜める。美加は途中、地面に荷物を置くと、コートポケットからタバコのフィルターを取り出して葉を巻いた。荷物を持ちなおしてたばこをくわえると家へ戻る。パリでの生活が長くなるほどに、いつの間にかルイの癖がうつってヘビースモーカーになっている。

美加の住むアパルトマンはパン屋からまっすぐに歩いたところにあつた。到着すると、一階にある店内をチェックし、まだお客がいることを確かめると裏手へ回って階段を上がった。鍵を鍵穴へ差し込む時、水洗いと乾燥で荒れた手が目に入り、美加は思わずそっと撫でる。

リビングへ入ると冷え切った空気が重かった。買い物袋をテーブルへ置くと電気をつけ、ヒーターのバルブをひねる。まだかじかんだままの手で、灰皿に灰を落とすと、美加は椅子にどっさり座り込んだ。

このアパートマンは一階がカフェで二階が住まい、仕事とプライベートが常に混同している状態だ。リビングキッチンの右隣が美加、廊下を挟んだ向かいにルイの部屋があり、その隣で、ちょうど美加の部屋の向かいに当たる部屋には、この冬リヨンからパリへ出てきたリズイが住み込みでアルバイトをするために暮らしていた。十七歳の少女を一人でパリへ行かせることを心配したルイの友人が、今はパリに住む彼へ孫を託したような形だ。夜は近くのキャバレーで踊り、昼間は店を手伝っている。この上の階にはルイの甥にあたるアンリが住んでおり、よそで修行を積んでから叔父を慕って手伝っていた。一日のほとんどを店内で過ごし、時々夕飯を食べにこのダイニングへやってくる。

美加はたばこを灰皿の上で潰してしまおうと、ようやくコートを脱いで袋から食材を取り出した。コートを部屋へしまいに行く時、ついでにルイの部屋をのぞいてみる。数年前、初めはプライベートな空間欲しさに自室が欲しいと美加が言うてからは、なんとなくルイの部屋を訪れる回数が減っている。同じベッドを共有しないパートナーなんて、というフランス人思考のルイは、そんな美加を日本人的すぎると否定しながらも聞き入れてくれた。久しぶりにのぞくルイの部屋は大きな窓から迫る夜の暗さのせいで、薄暗く冷たい空間に仕上がっているように見えた。

美加はキッチンへ戻るとすぐにオーブンを温めるためスイッチを押した。先にジャガイモを輪切りにし、ウサギのもも肉と一緒に炒めていく。炒めたものを耐熱皿に載せ、もも肉にオリーブオイルを塗って、ローズマリーを少々。その上から卵をかけるとオーブンへ入れて時間を五十分にセットする。美加が手を止め、壁にかけてある時計を見ると午後六時を指していた。急いでタマネギをみじん切りにすると、鍋に入れてコンソメスープを作る用意をしていく。鍋に入れた玉ねぎは数秒で湯の中へ溶けていった。バゲットをスライスしてトースターへ入れる。

料理の準備が整い、オーブンがちょうど仕上がりの合図を鳴らし始めた頃、ル

イとリズイが帰宅した。玄関の扉が開くと、冷たい風と二人の話し声が入り込み部屋の中が突然活気を帯び始める。

「いい香りだ」

ルイが入ってくるのと美加の両頬にキスをしてから、トースターの中をのぞいた。

「コクリコのバゲットなの。今日はサービスしてもらったから」

ルイは食卓に目を向けると、嬉しそうに美加に向かって笑いかけた。今日の食事が気に入ったということだろう。散髪したばかりの短髪がよく似合っている。美加はスープをよそうとオーブンから鉄板を取り出し、皿に料理を盛っていた。改めて三人が食卓に座ると、まるで家族のように見えた。

「このコンソメスープは味付けの具合がうまくいってるね」

ルイは一つ一つ料理を確認しながら口に運んだ。

「いつもと配分を変えてみたのが良かったのかも」

「食材の選び方が上手くなってきてるよ」

ルイにそう言われて美加は思わず口元が緩んだ。

「ところでアンリはまだか？」

ルイが一つ空いたままの座席に目を向ける。

「あいつはいつまでも落ち着かない。料理の腕は上がってるが、私生活は規律がなっていない」

ルイはそう言ってもう一度スープに口をつけた。

「いいじゃない、もう大人なんだから。あんまり口を挟むとアンリに嫌われるわよ」

美加が笑いながら言うのとルイが渋い顔をした。

「そうはいつでも、三十半ばなんだから、パートナーを見つけて自分の店を構えたっていいんだ」

「そんな子供みたいな扱いしたら本当に嫌われるわよ」

美加とルイの会話にリズイが笑った。店の中でも、ルイとアンリがいつもこんな感じでいるのをリズイは毎回、面白がってちやかす。

「今日の午後はどうだった？」

美加がリズイの方を向いた。

「プレートの四枚持ちができるようになったの。かなり効率的に仕事ができるようになったかな」

リズイが口を動かすと金髪の長い髪が揺れて電気の光に反射した。青い目が透き通って見える。

「お願いだから割らないですよ。店内の食器は一通り揃えてるんだから」

「大丈夫」

屈託無い笑みを浮かべると、リズイが食べている自分の皿を持ち上げた。

「このお皿もだめ、やっぱり店で練習して」

「はい」

そおつと皿をテーブルの上へ置くと、リズイがおとなしく椅子に座りなおした。

「リズイはなんていったってうちの看板娘だからな。最近若者の客が増えたのはそのせいだ」

ルイは嬉しそうに話している。

「リズイ効果ね」

美加が賛成するとそれを聞いた彼女が嬉しそうに声をあげた。

店は朝が早い。美加は早起きのルイにならってケーキを仕込むため一番に店に入るのが日課だった。材料は前日に仕入れを行い、フルーツは隣のフルーツショップから手に入れる。朝一だと選りすぐりの果物が手に入るとルイが言っている。聞かないので、おかげで毎日メニューが変わってしまう。新鮮と言っても、果物の大半はフランス属領のマルティニックやモーリシヤスからの輸入品だ。冬場にもマンゴーやパイナップルが手に入るわけだが、だからこそどれも採れたてというわけではない。

「今日も輸入品なの？」

呆れて美加が尋ねた。

「本日のメインケーキは洋ナシタルトだ」

美加の問いなど気にしないルイは、腕の中に大切そうに抱えた洋ナシを美加に見せてから、挨拶がわりに頬にキスをした。ルイが近づくと二人の体の中で洋ナシが潰れそうになる。

「今日は洋ナシが豊富だったんだ」

美加の耳元でルイが囁いた。

「店員のいいなりになってたら、毎日メニューが変わって大変じゃない」

美加が口を挟んでも、ルイはウインクを投げるだけで聞く耳を持たない。さっ

そく口笛を吹きながら洋ナシを洗い始めた。

「聞いている？」

ルイは定位置へつくと素早く包丁を取り出し、洗った洋ナシの皮を丁寧に剥き始めた。その動きに無駄はなく、年齢を重ねた手が器用に動く。

「美加、鍋にグラニュー糖と砂糖を入れてから温めて」

先ほどまで口笛を吹いていた様子とは打って変わって、真剣な声でルイが指示を出した。

「タルト生地は全部で五枚だ。今日は洋ナシタルトデーだな」

「今作ってる分量だと生地三枚分にしかないの」

「五枚だ」

美加の声を遮ぎるようにルイが声を張り上げた。

いつものことだが調理場へ入り、いざ仕事が始まると途端にルイが指揮を握る。この中ではルイの一声で全てが決まる。自分で決めたことは必ず実行するし、他の人の意見に聞く耳を持たず、料理のことになるといつだって頑固になる。美加は仕方なく洋ナシタルト五つのために材料を追加し、準備を整え直した。

「鍋に水を入れて温めて、早く」

ルイを見ると、今度はレモンを薄切りにしているところだった。相変わらず手が早い。美加は手に持っていたボールを置くのと急いで棚から鍋を引きずり出し、水を勢いよく入れて火にかけた。

ルイが切れたての洋ナシとレモンを鍋へ投げ入れる。すると殺風景だった部屋にかすかな香りが漂い始め、調理場全体が色づき始めた。

朝の始まりだ。美加はすぐに自分の定位置へ戻ると、生地を作るためにボールを片手に持ってバターを入れ、ゴムベラで混ぜ始めた。料理人はセンスだけでなく瞬発力も体力も必要だ。もたもたしているとタイミングを逃し良いものができなくなってしまう。砂糖、塩、卵黄、薄力粉、少しずつ材料を増やしていく。

「ボンジュー」

生地がまとまってきたので手の平で丸めていると、調理場の扉が開き、もう一色差し色が増えた。白いエプロンをつけ、茶色の天然パーマを垂らした長身のアンリがルイとハイタッチをする。

「ボンジュー」

今度は美加の方へ大股で向かってくると、大げさに抱きつき、かがんで頬へキ

スをした。日本人の美加にとっては、アンリの表現は少々大げさでフランス式すぎるものがある。しかし十五年近くも一緒に仕事をしていれば、いつのまにかそれらも日常の一部に溶け込んでくる。アンリは背格好や雰囲気などルイに似ているが、違うのはエプロンの上からでもわかるルイの腹の出っ張りがないことだ。

「見せてみなさい」

美加が生地をラップに包もうとしていると、それを見ていたルイが声をかけた。作業台へやってくると生地の間々にまで目を通し、次に手を伸ばして厚みと柔らかさなどを入念に確認した。

「いいじゃないか、冷蔵庫に入れたらこっちを手伝って」

ルイが感情を抑えたような低い声で言った。すごくいい、とか素晴らしいとか、そのようなことは昔から言わない。まあまあとか、いいよ、とか美加を手放しに褒めることはまずない。

「よくできてるね」

アンリもルイと同じように確認すると、続いて今度はルイが作っている鍋に指を入れて味見をした。次の瞬間、真面目な顔をして、ポケットからゴムを取り出し、伸びた髪を一つにまとめる。ルイの作品は食べる人だけでなく、作る人の心も揺さぶるものがあった。ここにいる全員がそんなルイに引つ張られてここにいるに違いなかった。

誰もがこの調理場へ足を踏み入れると、ルイの作り上げた世界に前へならえをする。三人にとつての聖域であり、そこには暗黙のルールと規律がいつのまにか出来上がっていた。

「ボンジュー、今日は朝から手伝います。よろしくお願いします」

調理場がいよいよ慌ただしくなり、開店が近づいたころ、リズイがひよっこり顔を出した。

「店内の掃除お願いできる？ 布巾はレジの横にあるから」

美加がリズイに向かって声をあげると、返事に甲高い声が響いた。

「リズイ、ちよっと待ちなさい」

ルイが手を止めると何も言わずに調理場を出ていった。外で彼女に指導をしようとしているらしい。

美加がアンリを見ると、彼も調理場の窓に釘付けになっていた。

「ルイが調理場を出るなんて珍しいね」

アンリが手を止めずに言うと美加も頷く。

「ルイが部屋から出ると空気が一気に変わる。それともリズムイが原因かもしれないけど」

「いずれにせよあのおっさんの考えていることはよくわからないよ。朝の忙しい時間に」

ルイが作業していた台の上では、飾り付けを待つモンブランケーキが何十個と並べられていた。美加は思わずため息をつき、飾り付けの続きをやるうとして手を止める。ルイはどんな時でも自分の聖域を乱されるのを嫌う。美加は仕方なく自分の作業台へ戻るとタルトに果物をのせ始めた。

「モンブランの仕上げを忘れてたよ」

数分後にルイが戻ってくると、何事もなかったように口笛を吹きながら作業の続きを始めた。「美加、こつちを手伝って」

「どうかしてるよ」

アンリが小声で呟いたのを美加はしっかりと耳の端で捉えていた。

「ボンジュール、荷物だよ」

昼過ぎになり、配達屋のジョンが店の前にバイクを止めた。テラスの向こう側からでも太くて低い声が店内まで聞こえてくる。美加は急いで手を洗うと、髪をしっかりと一つに結び直して入り口まで駆けつけた。

「メルシーボク、いつもありがとう」

ジョンは大きな体を身軽に動かすと箱を三箱、店の中へ運び入れてくれた。

「お疲れ様、僕宛の一つ来てなかったかい？」

いつもはジョンが来ても顔一つ出さないルイが珍しく玄関に現れると、なんとなく落ち着かない様子で彼に尋ねた。

「この二箱は美加に、こつちがルイ宛だ」

ジョンが小さな箱をルイへ手渡した。

「これだけかい？」

ルイが顔をしかめている。

「これだけだ。漏れでもあったのかな」

ジョンが寒そうに腕をこすると、テラス用の暖房に近寄った。美加の太ももほどの大きさもある腕を動かすと、テラスの空間が狭くなる。

「これは何？」

美加がルイの小さな箱をのぞき込む。

「カカオだよ。でももつと送られてくるはずだった」

「まさか、チョコレートケーキの誕生かい？」

ジョンが面白そうにルイを見た。

「それ本当なの？」

美加が驚いてルイを見ると、続いてジョンを見る。

「実はその通りだよ。バレンタインに向けてチョコレートケーキを作ることにしたんだ。日本はそうなんだろ？ せっかくだからさ」

ルイの頬が徐々に赤くなっていく。美加はそんなルイを不思議に思ってもう一度見た。

「それは素晴らしいや」ジョンが声をあげるとテラス中に響いた。

「それ本気なの？ だってルイはチョコレートが嫌いじゃない」

美加がルイに尋ねても彼は半分うわの空だった。すぐに軽い足取りで厨房へ戻っていく。

「チョコレートケーキを絶対に作らない店主がカカオとはね」

美加が支払いをする間もジョンは何かあったのかとしきりに尋ねた。

「わたしは何も知らないわよ」

日本ではバレンタインの主役がチョコレートだという話をしたのはもう何年も前の話だ。言い方がきつくなるのも忘れて美加は箱を受け取った。

「サプライズかな？」

ジョンがしつこく気にするので美加は「さあね」と答えて店内へ戻ろうとした。

「いつものコーヒーいいかな？ とびきり温かいのを頼むよ」

ジョンは何ごともなかったような顔に戻ると、美加に注文を頼んだ。

「これをするの良い一日がおくれそうなんだ」

ジョンは二杯分のコーヒー代金を美加に渡した。

「ありがとうございます。素敵な一日になりますように」

余裕のある人が次の人のコーヒー代金も支払う。そうすればこの料金を利用して自分でコーヒーを買えない人たちがやって来た。気前のいい常連客はいつもこうやって二杯分置いていってくれる。

「出かけてくるよ」

四時頃になってルイが美加を呼び出した時には、ルイはすでにエプロンを脱いでコートを着ているところだった。

「後は任せたまよ」

ルイが言うと美加の頬にキスをした。

「急にどうしたの？」

突然のことにルイの耳元で詮索するような言い方をする。

「リズイが疲れてるだろうから、気分転換に街を案内してやりたいんだ」

「行ってもいいでしょ？」

いつのまにかホールの仕事をほったらかしにしたリズイが来ると、美加に向かって懇願の眼差しを向けた。

「寒いからコートいるよ。取っておいで」

返事を聞く前から嬉しそうな顔をする彼女を引き止め損ねる。

「わかってる」

リズイはエプロンを乱雑に外して結んでいた髪を解くと、足取り軽くコートを取りに行った。

「どうした？」

厨房の外でのやり取りが気になったらしく、扉から顔を出したアンリが口を挟んだ。

「アンリはいいの、引っ込んでいて」

美加が声を放つと自分でも思っていた以上に不機嫌な声が出た。

「こういうのは早めに言ってよね。店が忙しくなるじゃない」

美加が盾突くようにいうとルイが慰めるように美加の手を取った。

「迷惑かけてごめんな、僕のできる仕事は全部やったから。夕食も外で済ませてくる」

「リズイを夜遅くまで連れ回さないですよ。わかっているとと思うけど、まだ子供なんだから」

一言吐いてもまだ言い足りない気がして美加が続けてルイを責める。

「それなら休業にすればよかったんじゃないの」

「コクリコのバゲットでも買ってこようか？」

ルイが機嫌を取るように声をかけた。

「いらない」

苛立った声になる。

「うまいもん食わせてもらえよ」

美加がルイに小言を言っている間、コートを着てすっかり準備を済ませたりズイが戻ってきていた。美加の後ろでアンリが彼女に声をかけているのが聞こえる。

「おすすめスポットある？」

「おう、ルイに教えてもらえ」

アンリが美加の方を見て、それからズイとハイタッチをした。

「気をつけてね」

美加はズイになんとか優しい声をかけると、二人の姿が見えなくなるまで背中を追い続けた。

「仕方ないな、俺たちも外食する？」

二人が見えなくなるとアンリがやって来て美加の肩に腕を乗せた。

「行かない。冷蔵庫の中身を食べてしまわないと腐っちゃうから」

何となく落ち着かないまま美加が言う口調がきつくなった。

「俺も準備手伝うよ。今夜は二人で盛大にやろう」

美加へのささやかな気遣いなのか、アンリの明るい振る舞いに、いつのまにか美加も飲み込まれていくようだった。店を締める頃には忙しさもあって、知らない間に昼間のことは忘れかけていた。夜は棚にしまっていたボトルワインを取り出し、美加とアンリで二本空け、それからデザートに残りも平らげた。

次の日になって、美加が昨夜のことをズイに尋ねたのはちよつとした興味からだった。ルイがこんな年の離れた彼女をどこへ連れて行ったのかということとは確かに気になっても、それ以上にズイの好みがわかればいいと思ったからだった。

「昨日はどうだった？」

美加がレジで作業の手を止めると、ホールに立つ華奢なズイの背中に声をかけた。

「昨日は突然店を出てごめんなさい。パリは最高ね」

ズイが青い目をぐるりと回して声を出すと、空気が無邪気に揺れた。

「気にしなくていいの、どこに連れて行ってもらったの？」

「まずカルフルでしょ、それからサクレクール寺院ね。あと、画家がたくさんいる広場も行った。あとは散策」

「それはアベス広場だ。次は三人で行こう」
厨房から出てきたエプロンをつけたままのルイが、美加とリズイの間に入った。

「そう、アベス広場だった」

リズイがルイの方を見ると二人で目を合わせて笑いだした。

「なんかね、寺院へ行く時、どうしてもルイはフニクレールに乗るって言って聞かないの。私は歩きたかったのに僕はしんどいから無理だつて」

「モンマルトルの丘は素敵だったでしょ。わたしとルイで昔はよく一緒に行ってたのよね」

美加が同意を求めるようにルイの方を見ると、彼も思い出したように笑顔になる。

「美加は飽きもせず今でも二日に一回は買い物帰りに寄ってるんだつて」

「ただの趣味よ」

昔の情景が美加の頭の中に突如現れまたすぐに消えていった。軽くあしらいながらも何かしつくりこないものがある。

「毎日行ってみたくなる気持ち、わかる気がするな。あそこには何か特別なものがあるもの、多分ね」

リズイが虚ろな表情をしているとお客が注文のために手を上げた。

リズイがそばを離れるとルイも自然と厨房へ戻って行く。一人残された美加は彼女の感じたサクレール寺院の魅力が自分のそれと重なっているような気持ちにして落ち着かなくなった。そこにはルイという一人の男性を通じてしか見えてこない特殊な情景が広がっていた。

「美加、会計お願いします」

澁刺とした声でリズイが自分を呼んでいるのが聞こえた。

リズイは若くて生命力に溢れていた。希望という未知の力が彼女の全身から発せられていることに、美加は少したじろいでいた。

まもなくして夕食の準備をするため美加が部屋へ戻る時間になった。接客をリズイに任せてルイとアンリに声をかけると店を出た。

「今日の晩は何？」

アンリが美加の背中に声を投げかける。

「どの食材が残ってるかわからない」

美加が適当に返事を返す。

家へ戻ると、まずはテーブルの上に置きっぱなしにしていた袋から葉を取り出し、フィルターで一気に巻くと一服した。美加が手応えを持って毎日を送ってられるのは、単純ではあるけれど自分の思い描いていたパティシエとしての日々がここにあるからだ。多少の変化はあれど、店と部屋の往復はもう何年も変わっていない。かつては目新しかったものがいつのまにか体の隅々に染み付いていた。美加が一服しながら夕食のメニューを考えていると電話が鳴った。電話本体が一週間ほど前から調子が悪いため、子機を探すがどこにもない。美加が注意深く耳を立てるとルイの部屋から鳴っているのがわかった。急いでタバコを灰皿へ潰すと電話を取りに彼の部屋へ入る。

“Hi. This is Bronte from KK Company. Are you Lui Aubrey?”

“……”

“Can you hear me?”

“Qi.”美加がとつさに返事をする。相手が話を続けた。

「商品の残りが再入荷しましたので明日、発送させていただきます。イギリスからの発送になりますのでしばらく時間がかかる予定です。それから確認なんです…」

電話の向こうからは早口の英語と電波がひび割れたような雑音が聞こえてくる。美加は急いで引き出しを開けると要件を書き留めておこうと紙とペンを取り出した。

「パリ動物園？」

引き出しに入っていたチケットの半券を見つけて驚く。

日付を確認すると先週、店が休みだった時のものになっていた。その日は壊れた部屋の扉を修理するため、アンリと一人で部品を買いに出かけていたので、美加はルイが留守番しているものと思いついていた。

“sorry?”

「大丈夫です、かしこまりました。では宜しくお願いします」

美加は電話の声に引き戻されると受話器を置いた。

大量のカカオが届くらしいということは理解できたものの、一体何のために注文したのかについてはわからないままだった。いい加減なところばかりのフランスでこんな突飛な電話は初めてではない。それなのに美加は力が抜けたようにベッドに腰掛けると無意識のうちにエプロンのポケットに手を入れてたば

こを探した。神経質に手を動かしながら、右と左ポケットを執拗に探る。どこにもないことがわかるとすぐに立ち上がってキッチンへ戻った。美加はテーブルに置きっ放しにしていたたばこの袋を取り上げ、苛立った手つきで葉を巻くと、なぜルイが突然相談もなしにカカオを購入するに至ったのかについて考えた。なぜなら、いつだって何か新しいことを始める時にはルイは必ず女性である美加の意見を求めたからだだった。モンマルトルはカフェやレストランの激戦区だ。店をうまく売り込むことと、流行りを取り入れることが大切で、おしゃべりで甘いものに目がない女性客に足を運んでもらうため、いつだって美加の助言を必要としていた。

美加は、夕食の用意を適当に済ませると、全員が帰ってくるまで椅子に座ってタバコを吸い続けた。時々、部屋の壁にかけた時計の針の音がうるさくて思考を邪魔した。

店を閉めて上がってきたのはルイとリズイだけだった。二人がドアを開けると相変わらず空気が変わった。席についてもまだ話し足りないのか会話を続けている。テラス広場でどの画家の絵が一番良かったか、アベス通りにある小さな教会に入ったこと、配達中のジョンに会ったこと。

「さつきちようどりヨンの友人が来てくれて、それでえらく地元の話で盛り上がったんだよ」

ルイが食べる手を止めると美加の方を向いた。

「そうなの？ 私も会いたかったな」

「美加によろしくと言ってたよ。パリに寄ったんだって」

ルイはいつもよりも興奮した様子で話を続けた。

美加は向かいの席でその興奮の根元についてしばらく考えた。

「それでね、その人が帰ってからもルイってば、随分前に潰れた店の話とかを懐かしそうに話するの」

リズイが食事を口に放り込みながら説明をする。

「そりゃ、リズイと僕が子供の頃じゃ街の様子も変わるさ」

「ほんとね、親子くらい歳が離れてるもの」

美加はこの時かろうじて会話の中に入っていた。それはとても難しく、困難を伴うことだった。普段、ルイと二人で話している時には気がつかなかったことだが、やはりまだ言葉の壁があることに気がつき、啞然とした。ちよつとした言い回し、イデオム表現、標準のフランス語しか知らない美加にとって、南仏特有

のアクセントや訛りには馴染みがない。ルイとリズイが二人で盛り上がった話をすればするほど、生まれた頃から身につけている田舎の訛りが強く出た。言語がわからないだけじゃない、同じ故郷の者同士が話をすると、よそ者は何一つ聞いていけないのと同じだった。

美加はなんとか二人の会話に耳を傾け、大きく肩で呼吸を繰り返しながら、時々相槌を打ってその場をやり過ごした。

「美加？ 何度同じテーブルを拭いてるんだい？」

次の日の朝、美加はルイに言われてようやく意識がはっきりし始めた。「テラス席はすぐに汚れちゃうから」

「ショーケースも忘れずに頼むよ」

ルイは美加にウイנקをすると、機嫌良さそうに厨房へ戻って行った。

気が向かないまま美加がショーケースを拭きに行くと、色とりどりのフルーツタルトやショートケーキが目飛び込んできた。なぜか心が洗われるような気持ちになる。味はもちろんだが見栄えも大切だ。グリーン、イエロー、レッド、バランスよく配置をして見せ方を変えるだけで味が変わる。

「今更チョコレートだなんて」

思わず独り言がこぼれた。

ルイは厨房へ入れば滅多に外へ出ることはない。それなのに、今日は頻繁にフロアと厨房を行き来して玄関を気にしている。

「どうしてそんなに出入りするの？」

しびれを切らせた美加がルイに尋ねた。

「なんてことはないよ、そんな気分だ」

美加はそれ以上聞くことをやめて、一日中目でルイを追った。

「カカオの件で何か連絡はあったかな？」

夜になってからルイが食事中に美加に尋ねた。

「今日は一日中それを待ってたのね」

美加が頷くとルイが恥ずかしそうに顔を赤くした。

「そういえば、昨日の夕方に電話があって、再入荷したからすぐに送りますって。言ってなくてごめんなさい。到着まで一週間くらいかかるのか」

「そうか」

いまだルイから何の説明もないことに美加は苛立ちを覚える。

「新しいチョコレートレシピは思いついたの？」

不意に会話を聞いていたリズィが口を挟んだ。

「だって、チョコレートケーキがないカフェなんて聞いたことがないもの」

「二人にはまだ言っていなかったね。カカオが届いたらチョコレートケーキを作りたいと思ってる」

ルイが一息おいて美加とアンリを見た。

「ルイがチョコレートケーキだって冗談だろ」

アンリが美加の方を向いて驚いた表情を作った。

「そうね、チョコレート嫌いのルイがね」

美加は返事をする、戸惑いを隠せなくなった。

「この間ジョンが箱を届けてくれただろ？ あれを使うんだよ」

ルイはすでにこの話を知っているであろうリズィに向かい、嬉々として新しいレシピについて話を始めた。

ルイは美加が作った料理には目もくれず、フォークとナイフをテーブルに置いたままだ。いつの間にか自分一人だけが会話から取り残されてしまったと感じた美加は、会話に乗ろうとしてみるがうまくいかず動悸が激しくなる。色とりどりだったショーケースが茶色に塗り替えられる様子を思うと気持ちが悪くなった。徐々に頭の中が混沌とし始め、この状況を終わらせたいのに、一向に收拾がつかないことに焦り始めた。

「そろそろデザートはどうかね」

アンリが、ルイとリズィの会話に声を挟んだ。

「食べたーい！」

リズィが嬉しそうな声を出した。

「いい案ね」

美加がアンリを見ると、彼の瞳がブラウンにもグレーにも見えた。アンリが目配せしたので美加が席を立ててキッチンへ向かう。

「大丈夫か？」気を紛らわせるために作ったケーキを冷蔵庫から取り出しているとアンリがキッチンへ入ってくる。

「もちろん」美加は何ごともなかったように手を動かし、包丁を取り出した。

「僕がやるよ」

アンリが美加の手から包丁を受け取るとケーキを切り始めた。後ろに立つと、

彼の大きい背中がいつも以上に逞しく見える。

「ありがとう」

美加はそれだけ言うと、ルイとリズイの座っている方へ目を向けた。

リズイのハリのある肌が潤って見えた。笑ってもシワが出来なくて、顔がクシヤクシヤになるぐらいに笑っているのに美しかった。意味もなく強烈な嫉妬心が美加の胸を突いた。彼女は誰よりも無邪気だった。田舎から出てきたリズイにとって、ここにあるもの全てが喜びに満ちているように美加には感じられた。長年、この土地に縛られ、他所へも行かず、過去に取り憑かれてばかりいる自分になんだか恥ずかしくなった。

「美加の新作だ」アンリがキッチンからケーキを運ぶと、わざとらしく音を立ててテーブルに置いた。

「ルイがオツケーなら店に出して欲しいかな」

美加は仕方なく、少し調和がみだり始めた輪の中へ戻る。

美加がルイを引きつけてこられたのは、抜群の味覚と腕を彼が買ってくれているからだだった。リズイがもしこのケーキを作ろうとしてもまだ長い時間がかかるだろう。美加は誰にも悟られないようリズイがケーキを食べる反応をうかがう。

「おいしい」

素直にケーキをおいしいと声をあげたリズイに、美加はもう一度強い嫉妬を感じた。食事中、アンリが美加の方を心配そうに見ていることに気がついたが、ついムキになってしまい気がつかない振りをつき通した。

次の日、美加は家の掃除をしたいからと理由をつけて早めに店を上げてもらった。何か決定的な証拠が見つかるかもしれないという憶測でルイの部屋へ入り、ベッド脇の引き出しを順番に開けていった。心臓がいつもより速く鳴って、手がかすかに震えている。落ち着かなくなってきたのでポケットに手を入れるとたばこを作って一服する。美加が動きを止めると家の中が奇妙なほど静まり返った。見つかったのは、『味見礼賛』の本の中に挟まっていた見覚えのないレストランのレシートだけだった。タバコをくわえたまま美加はレシートのシワを伸ばしていく。食事の相手は予想がつく。最近の二人の様子を見ていれば明らかだった。

「新しい料理の発見は人類の幸福にとって天体の発見以上のものである」

レシートが挟まれていた。ページに赤ペンが引かれていた。

ルイが人生の目的を忘れずに持ち続けていたことは美加にとって救いだったのかもしれない。しかし、不意に自分の居場所を失ったような気持ちになって不安になった。彼の他には誰も頼れる人などなく、今更日本に帰るつもりもない。今まで考える必要のなかった当たり前のことが変化していくのを美加は少しずつ感じていた。もう一度身に覚えのないレシートに目を落とす。今まで信じていたものや普遍だと思っていたことが目の前で音を立てて崩れていく。そして美加はなす術を知らなかった。

その夜一時を過ぎた頃、眠れず水を飲みまじりとした美加は、廊下を歩いている途中で物音に気が付き耳をすませた。いつもなら死んだように眠っているルイの部屋から笑い声が聞こえたような気がしたからだ。

「誰がいるの？」

美加は尋ねようとしてすぐに喉を詰まらせた。

食後に自分の部屋へ戻ったはずのリズイの声がしたからだ。ルイの部屋の壊れた扉の向こうから光が溢れていた。美加はその光景に目を奪われると全身が硬直するのを感じ、何も見たくないとい心の中で叫ぶ。しかし実際はそうはならずに視界に飛び込んできたものから目を逸らすことができなくなった。

左手奥にあるベッドの上で笑いを堪えながら話をしている妖艶な女性はリズイだった。ダンスで鍛えられた華奢な体に丸くて形のいい乳房が垂れていた。髪が乳にかかって、彼女が笑うたびにそれらが一緒になって鈴のように揺れる。白くて瑞々しい肌がスタンドの光に照らされ、ルイが割れ物に触るかのように優しく彼女の絹のような肌に手を滑らせていくのが見えた。唇、首筋、胸、彼がリズイの体に手を触れるたび、遠慮がちな彼女の歓喜の声が部屋いっぱい広がった。美加はその間ずっと扉の隙間から様子をうかがっていた。リズイは子供のようには振る舞ったかと思っただけの瞬間には大人の表情を見せた。美加にはリズイがふとした瞬間に見せる何気ない表情が十七の女の子にはどうしても見えなかった。だからと言って成熟した女のものでもなく、ちょうど年頃の女性が一番美しい、リズイはまさに盛りのただ中にいるようだった。ルイの目は今、彼女にまっすぐに注がれ、美加はたった一人で、扉の外から二人を呆然と見やっ

た。

「こつちへおいで」

ルイがリズイの口からたばこを奪い取ると、それを自分でくわえてリズイを力一杯抱きしめた。美加は苦悶し続けた。体の震えを止めることができず、扉が開いたままのことも忘れてその場に座り込んでしまった。身体の関係が極端に減ったとしても二人の関係が変わることはない、なぜこれまで思い続けてこられたのか、美加にはそれさえわからなかった。情熱は時を経て温かみに変わるものだと、それも一つの愛の形だと美加だけが独りよがりと考えていただけなのだとしたら。

腰が抜けて立ち上がれず、美加はそのまま這って部屋まで戻ると、なんとかベッドの上に体に乗せて胡座をかいた。ぐったり頭を垂らすと、先ほどまで抑えていたものが急に堪えられなくなり、やがて涙が止まらなくなった。初めは肩を震わせているだけだったのが、次第に激しくなり嗚咽が止まらない。必死で声を押し殺し、Tシャツで顔を拭うと、濡れてシャツにシミが広がるのがわかった。美加は顔を上げるとベッド脇に置いていたフィルターで葉を巻き始めた。震える手をなんとか動かし、何度も失敗してようやく形が出来上がる。次にライターを取り出すために引き出しを開けた。たばこを口にくわえたまま引き出しを開けていくがどこにも見つけることができない。葉の味だけが口の中に広がり、うまう息を吸うことができなくて余計に苦しい。動揺して言うことを聞かない手で一番上の引き出しを抜くと、美加は思い切り中身をベッドの上にぶちまけた。ライターを見つけて慌てて手をかける。しかし何度やっても火が付かない。苛立ちが増すと涙が勢いよく流れた。

ニコチンを肺へ入れると美加はようやく落ち着きを取り戻し始めた。何度かたばこをふかすうちに、ただ、何となく自分の乳房が気になり、確かめるように手を添えた。誰にも見せることなく触れられていないうちに、張りがなくなり垂れ気味になっていた。美加は急いで服を脱ぎ捨てると、たばこをくわえたまま全裸になって鏡の前に立ちはだかった。

久しぶりに自分の姿と向き合うと、日本人特有の貧弱な身体にそれほど大きくない乳がみすぼらしく二つくつついているのがわかった。乱れた黒髪がさまざまな方向へはねて、腫れて赤く充血した一重まぶたがこちらを見つめ返していた。美加は自分の姿に脱力するとそのままベッドに大の字になって倒れ込み、目を瞑った。

「こつちへおいで」ベッドの上で少しだけ上体を起こしたルイが美加の耳元で囁いた。

美加はルイの毛で覆われた厚い胸に頭を乗せ、心臓の音に耳をすませるのが好きだった。

「いい匂いがする」

大抵同じことを言った。まだ言葉がしつかりわからない頃は、アクセントを間違えて話す美加を笑って、ルイはいつも目元にシワを寄せていた。抱き合った後は毎回一緒にたばこを吸い、それからまた抱き合った。何度も同じ夜を過ごすうちに、やがて特別な夜は日常になり、家族になった。

美加は恐る恐る目を開けると、いつの間にか自分がぐっしより濡れていることに気がついた。

「今さら」

美加はため息をついた。どれほど強く願ったとしてもこの鬱憤が解放されることはない、ルイとリズイの様子を思い出してもう一度ため息をついた。

少しして喉の渇きに耐えられなくなった美加は、もう一度抜き足で台所へ向かった。コップに水を入れて何度も口をつけた後、今度は足早にルイの部屋の前を通り過ぎて、勢いよくベッドに寝転がる。

暫くたっても涙は止まるどころか、高ぶった感情を抑えることができなくなり、夜中にも関わらずアンリに電話をかけたくてたまらなくなった。しかし、子機をルイの部屋に置きっ放しにしていたことを思い出し、暗闇の中でいつの間にか口から離れてしまったたばこを探す。

それからの数日間、ルイが浮かれた様子を隠しきれなくなると、配達屋のジョンですら美加に何があったのかと執拗に聞いた。一方で美加は顔の皺がさらに深くなるのを感じながら無気力の状態が続いていた。朝の仕込みをしている時ですらルイが口笛を吹くのに対し、美加は彼の放つ言動すべてに敏感になり、過剰に反応をした。

日を追うごとにルイのリズイに対する態度が大胆になっていることも気が気でならなかった。他人にばれやしないか、アンリに勘付かれないうか、店の中で仮面夫婦を演じなければならぬことが美加にとって負担になった。

「あの二人は？」

その日の夕食はアンリと美加の二人だけだった。

「ルイがリズィを料理の勉強だからってレストランへ連れてった」

「行かなくてよかったの？」

美加が気丈に振る舞うとアンリが余計に心配をするようだった。

「だってわたしは何度も行ったことがあるもの」

「また意地張って」

アンリがフォークを持っている方の手で美加を突いた。

「張ってない」

美加が思わず大声をあげる。

「せっかく二人だし、ワインでも開けようか？」

アンリが席を立とうとして、美加がそれを止めた。

「そんな気分じゃない」

部屋が一瞬静まり返る。

「気晴らしにどこか出かけないか？ 今からでも」

「何もしたくないし、どこにも行きたくない」

「俺は美加の力になれると思ってるだけだ」

少ししてアンリが美加の腰に腕を回した。美加はその温もりに少し救われるような気持ちになる。しかし、ルイと過ごした時間を自ら壊してしまうのが怖くて何も言えなかった。アンリに知られることが恥ずかしくてみつともない。美加はすぐに泣き出したくなるのを我慢して唇を噛んだ。

「片付けようか？」

いつまで経っても手をつけていない皿を見てアンリが言った。美加が黙っているの、「このまま一緒にいようか？ それとも一人がいいか」と尋ねた。「ひとり」

美加は声にならない声を出す。本当は一緒にいてほしいはずなのに、まるで甘え方を忘れてしまったようだった。外へ出て新鮮な空気を吸えればいいのかもしれないがそれさえ億劫だった。美加は誰にも邪魔されず、一人殻の中に閉じこもり続けたいと願った。

「今日はゆっくり休みなさい」

アンリはそれだけ言うと、洗い物を済ませて自分の部屋へ帰ってしまった。

しばらくしてルイとリズイが帰ってきた。これまで心地よいと感じていたはずの人の出入りが、今の美加にはただの喧騒になった。

「ただいまー」

ルイはリズイに肩を担がれていた。

「飲みすぎちゃった」

美加に怒られると思っっているのだろう、酔って赤い顔をした彼女が苦い表情をして美加を見た。

「何やってるの」

美加は二人を見て動揺しながらも、ルイの反対側の身体をなんとか支える。

「まさかこんなことになるとは思わなくてごめんなさい」

声のトーンを落として謝るリズイは本当に反省しているように見えた。無邪気な姿が余計に美加を嫌な気にさせる。

「今日はこのまま寝かせるから。シャワー浴びてリズイも早く寝なさい」

美加はルイを半ばひったくるようにして彼女の腕から離すと部屋へ連れて行く。

「美加が羨ましい、なんちゃって」

頬を赤く染めたリズイが美加の背中に向けて言葉を放つ。

「おやすみ」

美加は振り返らずに声だけを出すと、ルイを部屋に入れて扉を閉め、閉まらないうドアを抑えるために椅子を置いた。ぐったりしているルイを何とかベッドまで引きずって行く。

「美加、リズイはいい子だよ」

ベッドに乗せるとルイが口を開けた。しかし狼狽する美加を放ってルイはすぐにいびきをかいてしまった。美加は抑え込んでいた怒りや鬱憤が今にも爆発するのを待ってみるが、それらはただ黙って身体の中を血液と一緒に巡っていっただけだった。

ルイが完全に眠ってしまうと、美加は遠慮気味にルイの隣に横になった。久しぶりにルイのベッドに横になると懐かしい気持ちにさえなる。背中を向けた彼の後ろから腕を回すと、首筋から懐かしい香りが漂ってきた。美加の涙が頬を伝って彼の背中を濡らしていく。

ジュテームの壁の前にルイと二人で立っている。美加とルイは手を繋いで肩を寄せ合い、長い間一緒に壁を見つめていた。

最近よく昔を思い出す、と美加は思う。相手が近くにいる時には何も感じなかったことが、相手が離れて行くほど過去に囚われ、何度も振り返り立ち止まった。

「美加」

ルイが寝言を言つて身体を美加の方へ向けた。

戸惑った美加は彼に背中を向けるために寝返りを打った。

その日、美加は、リズイの舞台を一緒に観に行こうと言う半ば無神経なルイに付き添い、彼女の働くキャバレーへ行くことになっていた。美加は直前まで自分が行くべきかどうかについて悩んでいたものの、当日になると、ルイとの外出が楽しみになり、アンリが止めるのも聞かずに二人で出かけることになった。リズイが働いているキャバレーは古めかしい昔ながらの建物が並ぶ歓楽街にあり、風俗店やアダルトショップが平然と軒を連ねていた。キャバレーはパリ・オペラ座学校の劣等生やリズイのように女優や歌手を目指す若い者たちの熱気で溢れている。ここでトップダンサーになれば芸能界から声もかかる。

「前にも思ったんだけど、娘のバレエの発表会に来たみたいだ」

座席に着くと、ワインを注文したルイが美加に耳打ちした。

「そのわりに女性が一人で歩くような場所じゃないけど」

美加は持ってきた花束を座席に置くと、気持ちを抑えて軽蔑するような声で答えた。

美加の座っている位置からは、舞台に向かって赤やブルーの品のないライトの明かりが見えた。客席はショーが始まる前から前奏が入り、それなりに座席も埋まって活気付いている。初めは冷ややかな視線で眺めていた美加も、舞台が始まるとまるで何かに吸い込まれたかのように舞台に見入った。時々ワインに口をつける時以外はずっと目は舞台に釘付けになった。胸を露わにして足を高く上げたり、ピルエットしたりするダンサーたち、きらびやかな衣装で声高々に歌う歌姫たち、いつも目にするリズイではない別の女性がそこにいた。美加がルイの方を見ると、何度か舞台を観たことがあるはずのルイですら、驚いたような表情を浮かべていた。彼女は本物だ、美加がそう思うと同時にリズイへの嫉妬が強くなる。予想していなかったわけではないが、リズイの美しさや才能を目の前に突きつけられると、どうしても自分と比較せずにはいられなかった。

舞台が終わってリズイに会うため楽屋を訪れた時、ちょうど若い男がリズイ

と話をしているとところだった。

「お疲れ様、よかった」

ルイと美加に頭を下げ男がその場を離れると、美加は持っていた花束を半ばぶつきらぼうに彼女に渡した。褒め言葉をかけてあげなければと思う気持ちと、彼女の才能を認めたくない気持ちとがせめぎ合う。「大人気ない」美加は自分に言い聞かせると、こわばる体でリズイを抱きしめた。

「驚いたよ」

ルイが半ば放心状態でリズイを抱きしめる。

「ありがとう、いつもこんな感じなの。ガラは悪いけど下積みだから」

リズイが恥ずかしそうに俯いた。

「リズイが一番良かった、大丈夫よ」

美加が何とか声を絞り出すとルイが頭だけこくりと上下させた。

「でもいつまでもこんな所にいる訳にはいかないよね」

リズイは舌を出して首を傾けた。

帰り道は美加もルイも黙って歩いた。何も言わないルイに「どうしたの？」と美加が聞くと、彼は首を横に振るばかりだった。自分とは別の感情を抱いているはずのルイが、一体何を考えているのか美加にはわからない。

それからルイとリズイはたまに外出に出かけ、家にいる時は三人で食事をした。ルイは舞台のことはあまり話したがらないようだったが、それは美加にとっても同じことで、食卓でリズイの仕事の話が持ち上がることはなかった。そうするうちに、美加が話しかけてもルイはうわの空になることが増え、次第に部屋から出るのを嫌がり、店を休みがちになった。アンリと美加の二人で厨房を守り、フロアをリズイに任せるものの、美加とリズイだけになると何となくうまくいかないことが多かった。

「体調悪いの？ なんでもいいから食べてちょうだい」

部屋に閉じこもっていたのは私の方なのに、こんな不満は結局言えないままだったが、美加はミキサーにかけた野菜を毎日ルイの部屋まで持って行った。

「後で食べるよ」

ルイは布団から顔だけのぞかせて起き上がろうともしない。

「昔わたしが寝込んだ時に作ってくれたスープよ」

美加はスープを差し出すが彼は首を横に振った。

「ずっと気分が悪いの？」

美加が心配して椅子に腰掛けようとする、ルイが一人にしてほしいと小さい声を出した。

「ちゃんと食べてね」

それだけ言うと美加は部屋を後にした。どうすればいいのかわからなかったからだ。

だいたいは次の日になるとスープは綺麗に食べられており、そのため美加は欠かさずスープを作った。それから数日が経って、ルイの方から美加を呼び出した時には、彼は珍しく起き上がり、ベッドの背にもたれて美加が来るのを待っていた。

「ルズイは仕事に出かけたから。店はアンリが片付けてくれてる」

椅子に座るよう指示を受け、美加の視線がルイの顔と同じ位置になると、この数日でルイが随分弱っているのがよくわかった。

「僕は美加を傷つけた」

ルイがおもむろに口を開けた。

「そうかもしれない」

突然の告白に驚きながら美加はできるだけ平静を装って言葉を返す。

「初めは僕も戸惑ったよ。頭がおかしいんじゃないかって何度も悩んだ」

ルイはゆっくりと言葉を選ぶように話し始めた。

「気持ちを抑えようとしたけど、しようとするほどダメだった。地獄に落ちたと思ったよ。ルズイはまるで昔の美加だった」

美加は俯いたまま黙っていた。呼び出されたので何事かと思ったが気持ちのいい話でないことはすぐにわかった。

「自然な成り行きだった。彼女が将来への不安を話すのを聞いていたらね。別に彼女を無理やり口説いたとかではない」

ルイは俯いた。

「浮気を弁解するつもりじゃないんだけど」

「ふざけないでよ」

黙って聞いていた美加が声をあげた。息が荒くなりそうになるのを何とか堪えるので精一杯だった。

「落ち着いて。大切な話だから」

いつも黙ってばかりだったルイが今は会話の主導権を握っていた。

「この間リズイと二人で食事に出かけただろ？ 彼女の店の常連客に会って親子と間違えられたよ」

ルイはそこでなぜやりに笑った。

「その男、僕たちがキャバレーに行った時にすれ違った奴だと思う。リズイに言い寄ってきたんだ。彼女の踊りを見た時にも感じたことだけど、僕は彼女を駄目にしてしまうかもしれない。このまま僕が彼女を縛っておくことはできないって、あの時からずっと考えていた」

ルイは窓の外を向くと遠い目をした。

「リズイは若い。一緒に成長することは僕にはできない。そう考えると、いつの日か自分からリズイが離れることが怖くなったんだ。リズイをこれほど想う気持ちを持たないと思ってる。今あるこの燃え立つような感情を失いたくない。この気持ち時間がともに薄れていくのに怯えたくないと思ったんだ。昔、美加を心の底から愛した時と同じだ」

青白い顔に虚ろな表情を浮かべたルイの頬に少しだけ赤みがさした。まるで子どもが手に入らないおもちゃを欲しがるようにだ、そう思うと美加はルイから目をそらした。

「わたしのことは考えないのね」

懐かしい感情が蘇ると同時に、美加の中で寂しさが募る。

「永遠にあの情熱のまま生きられたら、僕たちはもつと幸せになったんじゃないかって、最近思うことが増えたんだ。美加のことは大切だし、それは絶対に揺るがない。それなのに、リズイを愛する気持ちを止めることが出来ないんだ」

今度はルイがまっすぐに美加の目を見た。

「夫婦ってこういうものじゃないの？ わたしは恋人時代の情熱が愛情に変化するものが家族だと思ってた。あなたのことはいつも誰よりも大切だった。ねえ、やっтерることが気狂いじみてるとは思わないの？」

話すうちに言葉がつまり、美加は思わず窓の外に顔を向けた。

「美加の言う通りなんだと思う」

ルイのつくため息が部屋いっぱいに広がった。

「手を握ってくれないか？ 馬鹿げているのはわかってる。美加がいて、店があるのもわかってる。時々自分が間違っているんじゃないかと不安になるんだ」

ルイが美加の手を引き寄せて指を絡ませた。

「そう、ルイは間違ってる」

美加がルイの手を握り返し、消え入りそうな声を出した。

「老いた職人の手。随分乱暴に扱ったみたい」

美加は吐き出しそうなものをこらえ、今度はもう少し明るく振舞ってみる。

「美加の手はどうかな？」

ルイは少し歯を見せて笑った。

「この荒れは長年の水洗いと職人としての証なの、気にしてるから言わないで」

美加は自分の手に目を落とす。

「今も、昔の手もどっちも好きだ」

澄んだ目をしている、ルイに顔を向けた美加は思った。

「美加はどう思う？ 愛は永遠になり得ると思う？ もう何も手につかなくなってしまうって」

美加はルイの言葉を聞きながら下を向いた。頭がおかしくなりそうだった。

「スープはもう作らなくていい、僕には必要ないみたいだ。もう十分すぎるほど食べただろ？」

ルイが唇の端を少しだけ上げた。

「そういえば、チョコレートの箱は届いた？ 実はリズムに言われて注文したけど、やっぱり僕はチョコレートが好きじゃない。あと、この店はアンリと二人でやっていけるね？」

改めるようにルイが姿勢を正すと、握ったままの美加の手をもう一度強く握りなおす。

「何のこと？」

美加の声が引きつった。

「チョコレートなんてどうでもいいわよ、何をしようとしてるの？」

美加は握られた手を無理やり外すと声を荒げた。

「この情熱はいつか、いや、きつと近いうちに終わってしまうだろう。それを知りながら生きていくことが怖いんだ。僕はこの高ぶる気持ちを失ってしまうのを恐れてるんだ。どうかしてるのはわかってる」

弱々しいルイの声がした。

「こんな突拍子もないわがまま受け入れられるわけじゃないじゃない。わたしの気持ちなんて何も考えてないのね」

美加の出した甲高い声が壁にぶつかって部屋に響いた。

「店はルイの夢なんでしょ？ 何でリズムのことばかりなの？ 本当にどう

しちゃったの？ わたしと過ごした時間は何の役にも立たないのね。わたし達夫婦が築いた愛情はルイにとつて何でもないって言うの？」

美加が声を荒げる一方で、ルイはただ「ごめん」とだけ小さな声で呟いた。気の高ぶりを抑えきれなくなった美加が勢いよく立ち上がると、椅子が倒れ、床に当たるすごい音がした。混乱したままの状態で這うように部屋を出ると、そのまま玄関から飛び出し、扉も開けたまま転がるように階段を駆けおりた。

「アンリ、早く来て」

店の厨房に向かった美加が声を上げると、アンリが慌てて皿を割ってしまった。

「何があった？」

ガラスに映った自分の顔を見た美加はアンリの驚きに納得した。赤く腫した目に髪の毛が乱れている。

「ルイが」

息が切れてうまく声が出てこないのを、アンリは辛抱強く耳を傾けている。

「永遠の愛がって……わたしじゃダメなの」

美加は涙が抑えられなくなると、ますます声にならない声になった。

「あの人、リズィへの気持ちをいつか失うのが怖いって。彼女への気持ちを失いたくないって」

アンリが落ち着かせようと美加を抱きしめた。アンリが何か耳元で言っているが美加には聞こえない。次の瞬間、彼は美加の手を取ると、厨房の中もほったらかしに、大股で店を出て階段をのぼり始めた。力が抜けて歩けない美加をほとんど抱えるようにして上がっていく。アンリの靴のかかとが階段に反射すると、耳を塞ぎたくなるような大きな音になった。開けっ放しだった扉から家に入ると、アンリはまず美加をダイニングの椅子へ座らせた。

「まずはこれ飲んで」

アンリが水の入ったコップを美加に握らせると「大丈夫だから」と何度も言った。

「美加はここにいなさい」

暫くしてアンリが一人でルイの部屋に行ってしまうと、美加だけが部屋に取り残された。壁にかかった時計の針の音が気になった。先ほどまでそこに時計があったことすら忘れていたというのに、針は容赦なく時を刻み続けた。

ずいぶん時間が経ったと感じ始めた頃、向かいの部屋が騒がしくなった。

「自分の言ってることがわかってるのか、しっかりとしてくれよ。僕はもう何十年も二人を見てるんだ。美加のことも考えてやれよ」

随分してからアンリが聞いたこともない声で怒鳴っているのが美加の耳に入ってきた。

「最低だ……俺には理解できないよ。店はどうする？ 何のためにここまでやってきた？」

次の瞬間、家中が静まり返った。

ドアが勢いよく開けられる音がすると、付け足したように修理したばかりの金具の外れた音がした。美加が驚いて立ち上がる。

「美加」

アンリがダイニングに入って来ると、大股で美加に歩み寄り、もたれかかるようにして抱きしめた。しばらくそうした後、今度は唐突に体を離すと「迎えに来る」そう言って家を出て行った。

美加は呆然と立ち尽くしていた。アンリを追いかけることもできず、ルイの部屋へ行くこともできず、ただ予想もしなかったアンリの温もりだけが体を奇妙に覆っているのを感じていた。

再び玄関口が騒がしくなると今度はリズイがやってきた。美加の姿を見つけると慌てた様子を見せる。

「ルイなら自分の部屋に」

美加が声を振り絞ると、リズイは唇を固く結んで首だけで頷き、ルイの部屋へ向かって行った。もう一度力が抜けてしまうと美加は椅子に座り込み、ポケットをあさってタバコを探す。彼らが何の話をしているのかはわからなかった。時折美加のところにもリズイがすすり泣いている声が聞こえてきた。彼女が部屋に戻ってきて美加に顔を見せた時には、目が赤く腫れて泣きじゃくった後だった。

「あのね、ルイと二人でいる時、いつもルイは美加の話ばかりしていた。本当は羨ましかった」

涙を拭いたり、しゃくりあげたりしながらリズイがやつのことで口を開けた。

「私は美加みたいになりたかった。駄目だったけど、ルイを救えるのは美加しかないと思う」

美加が改めてリズイに顔を向けると、以前よりもさらに痩せているように見

えた。赤くなった目の下には大きなクマが出来ている。

「お世話になりました。色々謝らなければいけないかもしれないけれど、多分許してもらえないと思う」

急いで準備したに違いない衣類や舞台道具が、ボストンバック二つに詰め込まれていた。ここへきたばかりの頃は無邪気だった少女が、今はしっかりと地面に足をつけて美加とまっすぐに向かい合っていた。また大人っぽくなっている、美加は彼女を見つめてそう思う。

「気をつけて」

美加はリズィを抱きしめなければならぬと思う一方、全てを奪い壊し、去っていく彼女を殴りたいと思う気持ちを一度に噛み締めなければならなかった。

「さようなら」

リズィが扉を閉めると、異常なほどの静けさだけが残った。

それからルイは寝込んだまま何も口にすることがなかった。美加の用意する食事には全て手をつけず、誰が見てもそうだとわかるくらい日に日にやつれていった。計画的に自分で決めて実行しているとはいえ、美加にはなぜルイがこのような状態にあつて満足した笑みをしているのか理解することができなかった。美加はアンリに店を任せると臨時で人を雇った。毎日ルイのベッド脇に椅子を寄せ、ただ飽きもせず彼が弱っていく姿を見続けていた。時間が経つことをこれほど怖いと感じたことはなかった。いつ来るかわからない終わりを待つ恐怖が絶えず美加の心を蝕んでいた。

その日の朝早く、様子を見ようといつものようにルイの部屋へ入った美加は胸騒ぎがしてベッドへ駆け寄った。とっさにルイの口元に耳をつけるが何も感じられない。美加は彼のパジャマの襟を掴むと上下に揺さぶる。

「ルイ」

声を出すと声が部屋に響き渡って消えた。

「ばか、起きてよ」

今度は先ほどよりも力を入れて揺らしてみる。

ルイは目を覚まさない。美加の呼びかけにわざと答えず、まるで無理やり目を瞑っているように見えた。起きる気がない、起きるつもりがないのだ、美加にはそれが一番しつくりくるような気持ちがあった。何か自分へのメッセージのよう

なものはないかと布団をめくり、枕、ベッドの下をのぞく。棚の引き出しを開けていくと、手つきが粗く乱暴になった。挟まっていた紙を見つけて無理やり引き抜くと、シワがよって丸まった^{A 4}サイズの用紙が出てきた。美加が丁寧に紙を広げていくと、そこには新しいケーキのレシピが書かれていた。カカオの材料が上から消され、美加の分担作業も記入されていた。下まで目を通すうち、すぐに視界が霞んで読めなくなると、美加はもう一度ルイの側へ来て彼の体を揺する。

今度は馬乗りになってルイの名前を呼びながら体を揺すると、涙が溢れ嗚咽が抑えられなくなった。美加がなんとか涙を拭おうとルイの襟元に顔を寄せると、まだかすかに暖かい体から彼の香りがすることに気がついた。今度は胸に耳を当ててみる。昔なら跳ね返ってくるように聞こえた心臓の音が今はない。彼の体は静まり返っていた。次の瞬間、美加は無意識にルイのパジャマのボタンを外していた。胸元の毛がいつの間にか弱って白くなっていることに気がつく。今度はルイの体に覆いかぶさると彼の唇に自分の唇を合わせた。ルイからは何の返事も得られない。抱きしめると彼の体から最後の温もりを感じることができた。美加はセーターを脱いで下着を外すと、張りのなくなった乳を出し、彼のむき出しになった胸に擦り付けた。涙が二人の体を濡らし続ける。ルイの鎖骨にあった四つのほくろを見つきたいと、美加が必死に探そうとするも、視界が霞む中では見つけることができない。ルイの頬に手を置くと、シミや皺が嫌でも目立った。美加はこのままずっとルイに抱きついていたいという欲望をなんとか抑えようと、服も羽織らずベッドに腰掛けた。窓に目をやるとくすんだ空と向かいのアパートの締め切られた窓が見えた。ポケットからたばこを取り出しフィルターに葉を巻くと、一つをルイに、もう一つを自分の口に挟んだ。

ルイがまだ元気だった頃や昔を思い出すことは今の美加にできるはずがない。何も考えたくない、全てを受け入れることなど到底できなかった。

しばらくして美加がもう一度ルイの手を握った時、先ほどよりも冷たくなっってしまったことに気がつき、美加は急いで服を着て部屋を出ると、扉を閉めて鍵をかけた。

数日後に警察署の人間がやってくると、署に同行するよう美加に言い渡した。到着した先では二月だというのに暖房のかけられていない狭い部屋で、男がメモを取り冷ややかな表情で感情を込めずに尋問を繰り返す。

「彼は、今ある満たされた愛情が時間と共に薄れていくことを極度に恐れていました。私との間に起こった恋愛感情の変化に怯え、もう一度同じことを経験することに耐えられなかったのだと思います。なぜ、幸せの絶頂期において死をえて選んだのか、時間が経ってようやく私にもわかってきたような気がします。死をもつてその愛を永遠に変えてしまったのです」

美加が一気に答えると、今更ながらルイが感じていた本当の思いを理解できたような気がした。

「永遠にあの情熱のまま生きることができたなら僕たちはもっと幸せだったと思う？」

美加にルイの声が聞えてきたような気がした。

「彼は鍵がかかった部屋に閉じ込められていたんですよ。一体、本当は何があったんです？」

その男は美加の言うことの一つも理解できないというように何度もため息をついた。

「彼は自ら死を選びました。私にはどうしても止めることが出来なかった。彼が私を選ばなかったからです」

美加は無意識のうちにリズイのことを思い出していた。

「それにしてもですよ、死因は栄養失調による餓死だ」

男がノートを何ページもめくると書き留めたメモを淡々と述べた。

「物を作り続けた人間の食へのこだわりは、間違いなく一般人のそれとは違う。私ですら理解に苦しみました」

美加が顔を俯けると、向かいの席からまた大きなため息が聞こえた。

「奥さん。彼は店の若い女の子と浮気していましたね、それも関係あるんじゃないですか？」

「確かに彼女に嫉妬していました。十五年間夫婦として築いてきた落ち着いた愛情が本当に正しかったのかどうか、今となっては私にはもうわかりません。ただ、二人があの時、深く愛し合っていたことに戸惑っていました。でもだからといって殺そうと思ったことなどはありません」

驚きつつも美加がなんとか最後まで言い終えると、体から力が抜けてしまったように感じた。

「お疲れのようですので今日のところはこれで結構です。また必要であればご連絡します。お疲れ様」

男は疑いの目を向けながら呆れたような態度をとると、美加のために扉を開けた。

ようやく長い尋問から解放され、美加が警察署の出口を出ると、どんよりした分厚い雲が空を埋め、街にはいつもと変わらない灰色の景色が広がっていた。美加にはまだルイのことを思い出す余裕はない。何も整理できていなかった。

うつむいて歩き始めるとモンマルトルの丘から夕方を知らせる鐘がなった。

美加が顔をあげると、アンリが遠くの方で待っている姿が見えた。